２年Ａ組	めいたんてい２Ａ 大すきなかぞく	田中いずみ

１　単元について

（１）みらいの授業でめざす学習文化

みらいの学習は，たっぷり時間がある。途中でつまずいても，じっくりと考え，もう一度軌道修正をすることも十分可能である。ひとりひとりの子どもの求めに応じた学習が，みらいの学習なのである。子どもが自らの求めで学習対象とかかわりながら学習を進めていった。ひとりひとりが自分の思いを持って学習対象と関わり，自分の学習を進めたのである。みらいの学習をする中で私が育てたい力の一つに「課題を発見する力」がある。しかし，この力は簡単につくものではなく，以下のような経験をたっぷりとることで育まれるものと考えた。

ふしぎ発見…子どもたちは，生活の中からたくさんの“ふしぎ”を見つける。「なぜ，こうなるのかな。」「ぼくは○○だと思うけど本当はどうなのかな。」というふうに，子どもひとりひとりが自分のふしぎを持つことが，大事である。ふしぎがたくさんあれば，それだけ対象に対しての興味や関心もふえる。このおもいが今後の学習の原動力となり，エネルギーになると考えた。そして，子どもたちが，それらのふしぎを書き留める楽しさを通して，“ふしぎ発見能力”の高まりを期待したいと願い学習を進めていった。

ふしぎ表現…自分が見つけてきた“ふしぎ”をみんなに紹介する時，その“ふしぎ”がどれだけみんなの関心をひくかというだけでなく，いかに自分が見つけた“ふしぎ”をアピールできるかという表現する力も必要となる。話すだけでなく，実物を持ってきたり，絵に表したりするかもしれない。この共同の学びの場が、友達の“ふしぎ”に共感する感性を磨き，視野を広げていくことにつながるものと考えた。

～朝の会から広がる世界～

子どもたちはお話が大好だ。「きのう～さんと遊びました」「学校に来るとき，電車の窓から紀ノ川に大きな鳥が泳いでいるのが見えました。なんという鳥なのか知りたいです」。「家族で旅行に行って星の砂を拾ってきました。持ってきたので見て下さい。」など，たくさんのお話をみんなに伝えてくれた。子どもたちは通学の途中で，多くの人と接しながら，何気なく周りを見つめながら歩いていたのである。そして「見つけた！見つけた！」と言って，道に咲いている花や，家にあるふしぎなものなどをたくさん教室に持ちこんできた。教室に季節を届けてくれるのは子どもたちであり，それをみんなに披露できる場が朝の会であった。朝の会でお話をする子に，たくさんのおたずねが出される。子どもたちは，友達からのおたずねに答えたり，そのやりとりの中で，自分の経験と照らしあわせながら様々なことを考えていった。そして，朝の会の話がきっかけになり，今まで何気なく道を歩いていた子がちょっと意識して，周りを見つめながら歩くようになったようである。このように朝の会のお話を聞く中で，自分以外の生活に目を向けれるようなことがたくさんあった。朝の会でのお話が，みらいの学習のきっかけになり，それがクラス全体の課題となり学習が始ったのである。ひとりひとりの子どもの後ろに，その子の生きている生活がある。私は子どもたちと一緒にその生活を大事に学習を進めていきたいと願い実践をした。

～たからものノート（毎日の日記）から広がる世界～

毎日，子どもたちに日記を書いてもらった。何を書いても自由である。私は，いつか子どもたちが大人になった時にこのノートがきっと宝物になると思いこの日記を“たからものノート”と名付けた。そして子どもたちはたからものノートに毎日の思いを綴っていった。たからものノートを読んでいると，子どもたちの生活が見えてきた。“この子が今，どんなことに関心があるのか”“仲の良い友達は誰で，どんな遊びをしているのか”“家にいる時は，何をしているのか”・・・等々ひとりひとりの子どもの今の様子がよくわかった。その子の後ろにある生活が見えてきた。毎日，たからものノートを読んでいると，私も自然と声かけが多くなり，お互いの会話もはずんできたように思う。みらいの学習で“この子のこの発言”が“昨日の家でのあの出来事”に結びついたりすることが何度もあったのである。

（2）みらいの学習で大事にしたこと

二年生ということで，生活科を中心としてのみらいの学習を考えた。特に「たんけん」と「家族」この二つを中心に据え，じっくりと1年間取り組んできた。

まず一つ目の「たんけん」では，1 年間を通して附属小学校のまわりをたんけんした。たんけんを繰り返す中で町を見る目を育んできた。自分は一人で生きているのではない。たくさんの人や社会の仕組みの中で生活しているということを子どもたちに気づかせたいと願い町の中を何度も何度も自分達の足で歩いたのである。

二つ目の「家族」では，自分の生活の場であるおうちや大事な家族に目を向けることにより何気なく暮らしていたが，実は家族みんなで助け合って生活をしていたんだということに気付いてほしいと思った。そして，今まで以上にかぞくを大事に思う気持ちを持たせたいと願った。

2　実践の考察

（1）単元全体を通して

本単元では，自分が普段何気なく一緒に生活をしている家族にスポットをあてて学習を進めた。家族の学習をするときには，家庭環境を十分に考慮した上でひとりひとりの子どもに応じた指導をしていく必要がある。以前「○○さんのお家は，お父さんがいないからこの単元はかるく扱ってみよう」と言った声を耳にしたことがある。私はそれには反対である。プラーバシーを守った上で，やはり家族の素晴らしさを子どもたちに気付かせたいと思った。“自分が今ここにいるのは，お母さんが自分を産んでくれたから”“こんなに大きくなったのは毎日ごはんを作ってくれている家族がいるから”“いっしょにいるのは，やっぱりみんな大すきだから”・・・という気持ちを子どもたちに味わわせてやりたいと願った。そのためには，

◎　今まで何気なく過ごしてきた家族このことを，もう一度じっくりと見つめること

◎　実際に自分に出来るお仕事をやってみること

◎　お手伝いに自信を持ちクラスのみんなにじまんすること

この三つを大事に学習を進めた。子どもたちは，お手伝いをしてみて，はじめてお母さんやお父さんの仕事のたいへんさがわかったようである。また，楽しくお家のお手伝いができた子が多かった。子どもたちは，お家の人から「ありがとう」「助かったわ」「またお願いね」といった暖かい言葉をかけてもらうことで，自信につながり，ぐんと成長したようであった。そんな大好きな自分の家族のことをクラスのみんなに紹介するときには，どの子も得意げに自信を持ち，発表を

することが出来ていた。また，自分が家でお手伝いをしてすごく上手になったことをクラスのみんなの前で披露する“みんな見てみて聞いてみて！”の時間を作った。この時間は，自慢をする子もそれを見守る子もすごく真剣で，おたずねもたくさん出された。みんなの前で自分の自信のお手伝いの技を披露するときこそが“自分が主役，主人公”となるのである。どの子も意気揚々と楽しそうであった。ひとりひとりが大切でかけがえのない存在としてクラスに位置づけられ，安心して自分の居場所を見つけられる土台作りになったように思っている。土台が丈夫であれば，友達の間違っているところやアドバイスなども自由に出し合え，学級集団としての高まりが芽生えてきたように思う。そして，自慢の発表が終わった後に「ぼく（わたし）は○○名人になれますか？」とクラスのみんなにお尋ねをして，みんなから「なれますよ！」と言いながら大きな拍手をもらった時は，どの子も本当に嬉しそうであった。最後に，この単元が終わった時「家族ってやっぱりいいな」「わたしは家族と一緒にいる時が１番楽しいな」「これからは，自分にできることは自分でしなくっちゃ」という気持ちをひとりひとりの子どもたちに持たせたいと私は思っていた。そのために，本単元を大事にし子どもたちと一緒にじっくりと取り組んでいった。

（2）着目時の学びの変容

本単元では，３人の子どもに着目して学習を進めてきた。

本時での着目児に対しての願い

♥
大好きな家族のことを，いつもたからものノートで教えてくれている。お手伝いも一生懸命にがんばっていた。本時では，友達のじまんを聞いたり見たりする中で，今までの自分のお手伝い経験を生かした発言を期待したい。発言はすくないかもしれないが，友達に対して，この子のやさしい心がこもった発言がでれば嬉しいと思っている。

◆
何事に対しても意欲的に一生懸命に取り組む子である。本単元に入ってからも率先して発言したり，表現の方法を考えている。本時では，ビデオで撮影したおにぎり作りをもとにして，実際にみんなの前でおにぎり作りをする。友達のおたずねに対してもはっきりと自分の経験を交えての意見を言うことができると思っている。この子の生き生きした姿が予想される。

♣
日頃から，お家での楽しいエピソードや家族のこと，お手伝いのこと，ペットのこと・・などたくさんのお話を聞かせてくれる。朝の会でも楽しく発表できている。本時では自分が前日にみんなの前で技を披露し，名人に認めてもらった時のうれしさをもとに，発言できると期待している。

♥は，おとなしくてあまり自分の意見をみんなの前で発表することのない子であった。しかし，たいへん心のやさしい子で家族のことを中心に，たからものノートを毎日書いていた。本単元に入ってからはお手伝いが楽しくて，毎日毎日その様子を日記で知らせてくれるようになった。そして，“サンドイッチ作り”をクラスのみんなの前で披露してくれた。これがこの子にとっての自信につながり，その後何人かの子どもたちがサンドイッチ作りを披露した時に，その子たちにアドバイスをしたり，自分の感想を述べたりできるようになった。それがこの子にとって大きな自信へとつながりたいへん嬉しく思っている。

◆は，何事に対しても積極的な子なので，本単元でもじゅうぶんに自分の持っている力を発揮できていたように思う。おにぎり作り”のお手伝いの様子をビデオに撮ってきてクラスの

みんなに紹介してくれた。これがきっかけでその後何人かの子どもたちが，自分のお手伝いの様子をビデオやカメラにおさめてくるようになった。この子の言動はクラスのみんなに良い意味でのやる気や活気を与えてくれた。本人ももっともっと自分の自慢のお手伝いをみんなに見てもらいたいと意欲的であった。またお家の方も非常に協力的でこの子をしっかりとサポートしてくれていた。

♠は，「みんな見てみて聞いてみて」では“たまねぎいため”を披露し，２０分間すっと炒め続ける姿に大きな拍手が起こった。この子もこれが自信につながり，自分の思っていることを今まで以上にみんなに伝えられるようになっていったように思う。やはりクラスのみんなに自分を認めてもらえるということがこの子にとって非常に大きな意味のあることであったと思っている。

３　今後の課題と展望

この１年間は「めいたんてい」をキーワードに，町を歩き，様々な人やお店，社会の様子，そして自分の家族を見つめてきた。二年生の子どもたちは，非常に鋭い目で見つめ疑問を持つこともたくさんあった。しかし，４０人全員が，何度もお店に足を運び，店の人に質問をし，自分の疑問を解決することができたかというと決してそうではなかった。“「お店やさんごっこ」をしたいから，○○を見てこよう！”というめあては子どもたちはしっかりと持てていたのに，やはり自分自身が，ひとりひとりの子に適切なアドバイスができていなかったのかもしれない。ひとりひとりの追究を大事にしたいと思いつつ本当にそれができていたのかどうかが自信がない。ひとりよがりの部分がなかったのかをしっかりと自分で見直し，反省していかなければならない。

しかし反対に「大すきなかぞく」の単元では，学習対象がもっとも身近な家族であったので，子どもたちも非常に楽しく学習ができたと思う。今後の課題としては，学習対象を何にしていくのか，子どもたちが，今いちばん興味があることをしっかりと探っていく必要があると思う。学年での成長過程をしっかりととらえた上での，対象の選び方，関わり方，自分の追求の仕方を学ばせていきたいと思っている。

４　実践研究テーマの設定

自分が考えているテーマは二つある。

まず，ひとつめは，どの学年を担任しても，自分は「かぞく」をテーマにした学習を進めていきたいと思っている。１年間を通してでなくてもいいが，どこかでじっくりと子どもたちと一緒に取り組みたいと思う。なぜなら「かぞく」を見つめることで，自分の存在が見えてくると思うからである。自分はひとりで生きているのではない，社会の様々な人の中で，そしてかけがえのない家族の中で生きていることを感じてほしい。そして，自分の誕生「命」の学習へとつなげていきたい。「家族」そして「命」の学習が子どもたちの心に１粒の種となり，いつか大きな花を咲かせてくれたらいいなと思っている。

ふたつめは，「しごと」をテーマにした学習をしたい。「はたらくこと」そして「お金をもらうこと」そういった社会のしくみが実感できるような学習をしたいと思っている。自分もしっかりとはたらく体験をするのである。そうなると，学習対象をしっかりと見据える必要がある。アンテナを高くして子どもたちを観察して，学習材を選ぶことがまず，自分にとってのいちばん大事なことである。